

# 「やる気応援奨学金」レポート

## オックスフォードで法を学ぶ 人生最大の挑戦で手応え実感

法学部法律学科三年 北見 瑛子（神奈川県立横浜国際高校）



大手旅行代理店を訪問し、「グローバル人材とは何か、海外駐在はどのようなものか」といったことを考える貴重な機会に多く恵まれました。

A university in Tokyo

「世界随一の学びの舎オックスフォード大学で法と経済を学ぶ」。そんな突拍子もない夢を何度見たことだろう。留学経験もなければ学部成績が特に秀でた学生ではない。しかし「やる気」と「根拠のない自信」だけは日本一の私が、「やる気応援奨学金」の御支援をいただき夢をかなえ、オックスフォード大学はオリオルカレッジの門をたたいたのは二〇一三年夏のことであった。

今回私が参加したサマー・ロー・スクールとは、「数週間にわたり世界各国から集まった学生と共に寮生活を営みながら法と経済を学ぶ」というまさにオックスフォー

ド大学での生活を疑似体験出来るプログラムであった。教科は「法学」「知的財産権の運用」「国際税



BBCでラジオドラマ制作体験

制「EU経済」の四科目でいずれも同大学の教授若しくは大学院生が教える。期末には試験があり、パスをしなければ単位は授与されない。また、文化や産業を学ぶ機会も数多く用意されており、授業の合間や休日には、底浅の川を三日月の鉄製の棒を突いて進むオックスフォード伝統文化「パンティンク」の体験や、郊外にあるブレナム宮殿観光やBMW傘下に入ったMIIMIの工場見学、週末などにはロンドンに向きBBCを見学するなど盛りだくさんの内容であった。そのほかにも、オックスフォードにあるロースクールとビジネススクール、ロンドンとパリの

カレッジ中庭でのウエルカムセレモニー。青芝に純白のクロスが掛けられたテーブルが幾つも並び、軽食とウエルカムドリンクが振る舞われる。一二世紀創立から数々の歴史を作り上げた指導者を輩出してきた石造りのカレッジの荘厳さに圧倒され、長旅の疲れからか英語はろくに聞き取れず、渡航前の威勢のよさはどこへやら。「とんでもないところに来てしまった……」。そう意気消沈しているところへプログラムの支配人がやってきた。今年は全体でトーダイとワセダから君を合わせて五人の日本人がサマースクールに参加している。君も University of Tokyo かね?。」

プログラムの支配人が聞いた。「いえ、中央大学と言って優秀な法曹を多く輩出してきた。東京の大学です」。「そうか。『A university in Tokyo』ね」とウインク。お手並み拝見、といった様子である。「見てなさい！全科目優秀な成績で単位もらって修了してやるんだから！」。こうして無事「根拠のない自信」と「やる気」を取り戻し、人生最大の挑戦が幕を開けた。

トイレで辞書を引く

最初の科目「法学」。曲がりなり



ロマンチックだが全く進まないパニング

にも、二年半にわたり学部での勉強の傍ら法律関係の英語は出来る限りのことをやってきたつもりである。だが、甘かった。初老の教授の英語はオックスフォード独特のなまりに加え、もごもごとしゃべるため聞き取れない。ほかの参加者にとっても英語は第二外国語であるが、横を見ても誰一人辞書を引く様子はない。仕方なく分らない単語をノートに書き連ね、休み時間が来る度に「ちよつと、トイレ行ってくる」とこそこそ調べるしかなかった。ほかの生徒に「アキコはおなかでも壊したのね」と思われていたに違いないが、ああ決心した以上何も学ばぬまま帰るわけにはいかないのである。寮に帰ってから、学部で学んだ英米法の知識を頼りに膨大な量のレジユメを読み込み授業に臨んだが、試験は七五点と合格点（七〇点）を辛うじてクリア。危なっかしい滑り出しである。しかし伝統的司法制度を重んじてきたイギリスが直面する問題、すなわち

「社会の進化に対応しきれない現制度の限界」を考えると同時に、

アメリカと異なり「司法」が身近ではないイギリス社会の現状について考え、改善策を探るといふ論点は非常に面白く、仲間との議論にも花が咲いた。

仲間との時間

今回のプログラムには一〇カ国から一九人が参加していた。実務家やロースクール生が多く、学部生も数人。特に仲良くしてくれたのはベルギー、スロベニア、オーストリア、そしてウズベキスタンの学生であった。空き時間を見つけてはカフェで社会保障制度や司法制度について議論したり、お互いの部屋で遅くまで恋愛や将来について語り合った時間は、掛け替えのない一生の宝物である。

「アクセサリより本が欲しい」

「彼にもらってうれしいプレゼントは？」と聞くとこんな声があったが、世界で最も優秀な彼女らの読書への情熱には目をみはるものがある。英国、ロシアの古典から米国現代文学まで守備範囲は広い。一月六日付の『東洋経済』誌

フェアウェルパーティーでの一枚



の特集「1%になるための読書」に、「国際会議等に出席すると必ずお勧めの本、情報を交換している場面に遭遇する」との記述があったが、オックスフォードでもまたしかりであった。本の話題は尽きず、部屋に遊びに行けば「お土産に買った本」が必ず数冊積まれている。だが彼女らが本の虫かと言えば必ずしもそうではなく、映画、アウトドア、音楽と趣味は多岐にわたる。せっかく来たのだから、と「オックスフォードがお勧め

めする映画リスト」を求めてカレッジを聞き回っていた学生がいたように、新しい知識に際限なく貪欲である。その教養の深さから彼女らとの会話は非常に高度なユーモアにあふれ、刺激的だった。と同時に、今まであまり本も読まず音楽も聴かず興味のあることしかやってこなかったことを大いに反省した。勉強はもちろん頑張らなければいけないが、好きなこと・興味のあることにとどまらず知識は貪欲に追求しよう、そう思った。

### 最後の難関「チュートリアル」試験

オックスフォードの伝統的な学修法として有名な「チュートリアル」。学部生が「チューター」と呼ばれる指導員に付き、勉強の仕方からマナーまで学ぶ、という制度である。学生は授業で学んだことからあるテーマについてエッセイを書き、チューターに添削や文献のアドバイスを受ける。「せっかく英国まで来たのだからチュートリアルを体験して帰って！」との教授の御好意により、「国際税制」の

単位認定試験では四択の試験ではなく、「チュートリアル」による評価がされた。私に与えられた課題は「国際税制においてしばしば問題となる二重課税の解決方式として『Credit Method（外国税額控除方式）』と『Exemption Method（国外所得免除方式）』のどちらの制度がより効果的かについてエッセイを書き、クラスでプレゼンせよ」というもの。質疑応答にも耐えなければならぬ。授業自体はインタラクティブで比較的分かりやすいものであった。しかしエッセイを書きプレゼンとなれば話は別である。完璧に理解していなければ書けない。前日は寮にこもり徹夜で準備に徹したが、内容理解も乏しいまま書いたエッセイと苦し紛れにやった発表は今ままで最悪の出来。質疑応答にもろくに答えられず、今までの自分の思考回路の乏しさと勉強不足をこれほどまで恨み、後悔したことはなかった。すさまじい敗北感。気温一〇℃前後、雨が激しく降る中なじみの店で食べたラザニアの温かさに、涙が止まらなかった。

### 大事なのは中身

辛酸をなめた今回の試験であったが、評価の程は意外にも上々であった。「一般論にとどまらず、日本政府にとってどちらの方式が有効かという具体的な検討にまで踏み込んだこと」については、どうやらそれなりの評価を受けたらしい。大いにげたを履かせてもらったことには間違いないが、正直にうれしかった。「日本でも海外でも、大事なものは中身。英語のブラッシュアップに加え、専門の勉強も更に頑張らねば」。確かな手応えと浮き彫りになった課題を土産に、人生最大の挑戦は無事幕を閉じた。実はこのチュートリアル試験でスタンディングオーベーションを受けたのは、英語が母語であるオーストラリア人の学生でもインド人の実務家でもなく、日本の若手弁護士であった。彼の英語は流暢とは言えない。しかし授業を受けていない人にも理解させてしまう説明の分かりやすさと、斬新な切り口、研究者に異論を申し立てる透きささえ与えない論理性に一同た

だただ脱帽であった。すっかり自信を喪失した私に「失敗から学んだことを日本に帰ってどう生かすか、が大切ですよ」。そう言い残し、彼は一足先に日本へ帰国した。畑は違えど、かの弁護士のような素晴らしい仕事をしたい。課題は山積しており、この凡庸な学生にそれが果たして可能なのかも分からない。しかし今回の留学で得た確かな手応えを頼りに、彼のように私自身の考えがいつかグローバルな場で評価されることを夢見て、残された一年、それから学部を卒業した後も勉強を続けていきたい。そして最後に。まさに人生を変えたと言っても過言ではないこの素晴らしい体験は、中大の先生方を始め、友人、現地で出会った方々、そして家族の支えなしにはありえなかった。感謝してもしきれない。特に、法律英語の学習支援から今回の留学を応援してくださった小室先生を始め、山本先生、長島先生、OB・OGの皆様にごの場をお借りして感謝を申し上げます。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。